

おはようございます、校長の関田です。こうして生徒の皆さん全員に向かってお話をするのは、完全登校が再開した6月15日の「Clap for carers」以来になります。

医療従事者の方々への感謝と応援の気持ちを、拍手で表した取組みでしたね。あの時には、医療従事者をはじめ様々な分野の方々の懸命の努力や、皆さん自身の努力によって、新型コロナウイルス感染拡大は徐々に収まりを見せていました。

しかし、その後、再び全国で感染状況が拡大し、感染拡大以前の生活様式に戻ることは、今なおできていません。そのため全員が一堂に会しての朝礼は自粛して、今日はオンラインの形にしました。顔と顔を合わせてではないけれども、放送による音声だけではなく、映像とともに皆さんにお話しできることを嬉しく思います。

そのような感染状況の拡大を少しでも防ぐためにMOISができることを考え、担任の先生方から既に聞いている通り、グループ単位での学校生活を継続することにしました。今のところ10月10日の前期末までは、これまで通りグループ単位での生活になります。今後感染状況が落ち着けば、本来のクラス単位での生活に戻すことになります。

でも、当初の予定通り、すべてのグループでグループ担任の先生方は変わりました。新しいグループ担任の先生方を、どうぞよろしくお願いします。

さて、ここからが今回の「校長先生の話」です。まずは、最近の2つの出来事を見てみましょう。

1つ目は、これです。「安倍総理大臣 持病の悪化で辞任」。

先日、安倍総理大臣が持病の潰瘍性大腸炎悪化を理由に、辞任すると発表しました。歴代の総理大臣の中で最長となる約7年8か月の連続在任期間を更新したばかりでした。皆さんが小学生になる前から総理大臣でしたから、皆さんにとっては日本の総理大臣として最も身近な存在でしょうね。

辞任の理由についてご本人は記者会見で、こうおっしゃっていました。

「病気と治療を抱え、体力が万全でない中、大切な政治判断を誤ることがあってはならない。国民の負託に自信を持って応えられる状態でなくなった以上、首相の地位に在り続けるべきではないと判断いたしました。」

そして「コロナ禍の中、職を辞することを心よりおわびいたします。」と。

2つ目は、これです。「池江璃花子さん 闘病後の復帰戦出場」。

先日、競泳女子の池江璃花子さんが、東京都特別大会の女子50メートル自由形に出場し、組で1着、全体で5位となりました。池江さんは4年前のリオデジャネイロオリンピックに16歳で出場して活躍した後、2年前のアジア大会で全競技種目において日本人選手初の6個の金メダルを獲得し、大会 MVP にも選ばれました。しかしその半年後の昨年2月、急性リンパ性白血病と診断され、それ以来治療に専念し、約1年6か月の間、競技から離れていました。

復帰戦に出場した感想をご本人は記者会見で、こうおっしゃっていました。

「またこの場所で泳げたということに、自分のことだけど感動しました。戻ってこられたんだなと実感しました。大きく言えば、第2の水泳人生の始まりです。」

「(目標は) まずは(10月の) インカレ。一番の目標は2024年パリオリンピックに出場

することなので、パリに向けて徐々に体を戻していければいい。」

誰もが病気になる可能性を持っています。誰もが病気になりたくてなるわけじゃありません。病気になって一番辛いのは本人です。そして本人が闘う相手は、何よりもまず病気そのものです。病気と闘って、病気に打ち勝って、心身が健康な状態を取り戻すことこそが、最も重要なことです。

安倍首相は、病を抱える一人の人間として潰瘍性大腸炎と闘っています。池江璃花子さんも、病を抱える一人の人間として白血病と闘っています。二人とも、まさに生死を懸けて闘って来ましたし、今なお闘っています。

しかし、病気になってしまった人は、病気そのものとの闘いに加えて、時として「病気になった」ことに対する社会や世間からの批判や非難、誹謗や中傷、差別や偏見とも闘わなければなりません。

かつては「社会」とか「世間」という不確かな集合体は、報道機関などマスメディアが代表していました。しかし今や、インターネットや SNS の普及により、誰もが簡単に発信者になれます。しかも自らの素性を明かすことなく匿名で、ダイレクトに世界中に発信できます。つまり、今では「社会」や「世間」とは、実は私たち自身のことでもあるのです。仮に自分の言葉で意見や感想を発信しなくても、誰かの発信に「いいね」を押したり、リツイートしたり、SNS で拡散したりすることで、私たちはいとも簡単に「社会」や「世間」になってしまうのです。

そのため時として私たちは、悪意の無いままに、病気と闘う人に対して、もう一つの闘い、つまり「病気になった」ことへの批判や非難、誹謗や中傷、差別や偏見との闘いを強いることになるのです。

では、多くの人々が直面している新型コロナウイルス感染症においてはどうか。

先月半ばに、国立成育医療研究センターという研究機関が、ある発表をしました。分かりにくい名称の機関ですが、英語で示すと少し分かりやすくなります。National Center for Child Health and Development、つまり子どもの健康と発達のためのセンターです。

発表の内容は、「コロナ×こどもアンケート 第2回調査報告書」です。これによると、緊急事態宣言解除後、多くの学校が再開された6月中旬から7月下旬に、全国の小中高校生およそ1000名がアンケートに答えたものだそうです。

この報告書は全部で72ページもあって、詳しくはとても紹介しきれませんが、その中で特に次の5点について、中学生による回答だけを示します。

- ・「マスクをつけていても、コロナにかかることはある」「熱も咳もなく元気でも、コロナにかかっていることがある」ことを「知っている」と回答したのは90%以上
- ・「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたい」と回答したのは33%
- ・「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたいと思う人が多いだろう」と回答したのは62%
- ・「コロナになった人とは、コロナが治っても付き合うのをためらう」と回答したのは1

1%

・「コロナになった人とは、コロナが治っても付き合うのをためらう人が多いだろう」と回答したのは38%

「～人が多いだろう」という回答は、自分自身はそうしないけれど、「社会」や「世間」ではそうするだろう、という意識の表れなのでしょう。でも、私たちはいとも簡単に「社会」や「世間」になってしまう恐れがあることは、先に述べたとおりです。

センターの調査結果報告書では、「おわりに」で次のように述べられています。

「コロナに関連した差別や偏見が、こどもたちの周りにも少なからず押し寄せていることが分かりました。多くの人が「コロナになった人とは、コロナが治っても、付き合うのをためらう人が多いだろう」と感じてしまう社会では、「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたい」と思ってしまう人が増えるでしょう。正しい知識をもつこと、自分や周りのひとを大切にす気持ちをもつことが、いま特に必要とされているのではないのでしょうか。」

MOISでは、生徒の皆さんも先生方も、自分がすべきこと、できることを行って、感染を予防しています。ありがたいことに、これまで一人の感染者も出ていません。それでも、いつ誰が感染しても不思議ではないと覚悟しています。なぜなら、どれだけ気を付けていても、誰もが病気になる可能性を持っているからです。新型コロナウイルス感染症にしても同じことです。

これから先MOISで、いつか誰かが感染したとしても、私たちはその人を特別だとは考えません。ましてや感染したことを責めたり、悪口を言ったり、仲間外れにしたりしません。これから先MOISで、もし感染が拡大して、臨時休校になったり、学校行事が中止になったりしても、それはウイルスのせいであって、感染した人のせいではありません。もし自分や家族が感染した恐れがあっても、それを秘密にしないで、正しい対応ができるよう、まずは保健所に、そして担任の先生に相談してください。

もしMOISの仲間が感染してしまっても、ウイルスとの闘いに専念させてあげましょう。誹謗や中傷、偏見や差別などとの「もう一つの闘い」をさせることがないように、自分自身の言動をきちんとコントロールしましょう。色々な思いや考えが頭に浮かぶかも知れないけれど、何を口にするか、どう表現するか、相手の心情を思いやって、心無い言葉や態度にならないよう、表現する前に考えましょう。

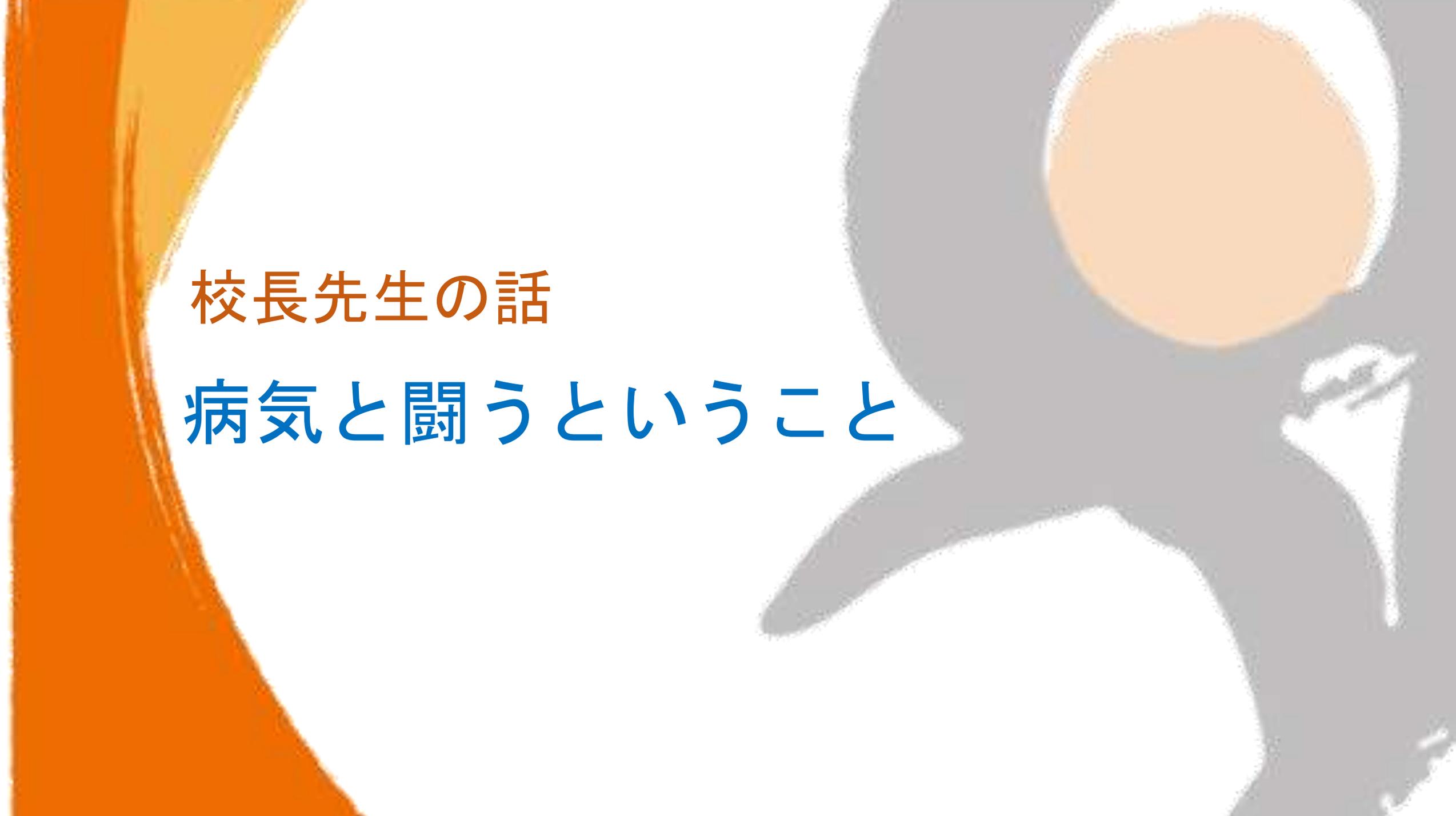
MOISが目指す「よりよい世界の未来」は、例えばそうやって実現していくのです。

昨日配られた「ほけんだより」も、ぜひ読み返してみてください。以上です。

<資料>

国立成育医療研究センター「コロナ×こどもアンケート 第2回調査報告書」

https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/report_02.html



校長先生の話

病気と闘うということ



最近の2つの出来事

1 つめ「安倍総理大臣 持病の悪化で辞任」
潰瘍性大腸炎の悪化で職務を全うできない
歴代最長の連続在任期間を更新したばかり



© JBpress 提供 安倍晋三首相と菅義偉官房長官
(写真：代表撮影/ロイター/アフロ)

2 つめ「池江璃花子さん 闘病後の復帰戦出場」
東京都特別大会の女子50メートル自由形に出場
白血病の治療後、約1年6か月ぶりのレース



レース後に涙ぐむ池江璃花子選手
(代表撮影・時事)



病気と闘うということ

誰もが病気になる可能性を持っている

誰もが病気になりたくてなるわけじゃない

病気になってしまった人が闘う相手は、何よりもまず**病気そのもの**

But 時として「病気になった」ことに対する**社会**や**世間**からの
批判・非難、誹謗・中傷、差別・偏見とも闘わなければならない

「社会」

「世間」

かつて：報道機関などマスメディアが代表



インターネット、SNSの普及など
私たちの誰もが「発信者」になれる

今：私たち自身が「社会」や「世間」になる

悪意の無いまま、「もう一つの闘い」を強^しいることに



「コロナ×こどもアンケート 第2回調査報告書」

国立成育医療研究センター (National Center for Child Health and Development)

以下、中学生の回答から

「マスクをつけていても、コロナにかかることはある」

「熱も咳もなく元気でも、コロナにかかっていることがある」

ことを知っている 90%以上

「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたい」

33%

「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたい
と思う人が多いだろう」

62%



「コロナ×こどもアンケート 第2回調査報告書」

国立成育医療研究センター (National Center for Child Health and Development)

以下、中学生の回答から

「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたい
と思う人が多いだろう」 **62%**

「コロナになった人とは、コロナが治っても付き合うのをためらう」
11%

「コロナになった人とは、コロナが治っても付き合うのをためらう
人が多いだろう」 **38%**



「コロナ×こどもアンケート 第2回調査報告書」

国立成育医療研究センター (National Center for Child Health and Development)

以下、中学生の回答から

「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたい
と思う人が多いだろう」 62%

「コロナになった人とは、コロナが治っても付き合うのをためらう
人が多いだろう」 38%

「～人が多いだろう」・・・自分自身はそうしないけれど、
「社会」や「世間」ではそうするだろう

But

私たちはいとも簡単に「社会」や「世間」になってしまう恐れがある



「コロナ×こどもアンケート 第2回調査報告書」

「おわりに」として…

コロナに関連した差別や偏見が、こどもたちの周りにも少なからず押し寄せていることが分かりました。

多くの人々が「コロナになった人とは、コロナが治っても、付き合うのをためらう人が多いだろう」と感じてしまう社会では、

「もし自分や家族がコロナになったら、そのことは秘密にしたい」と思ってしまう人が増えるでしょう。

正しい知識をもつこと、**自分や周りのひとを大切にする気持ち**をもつことが、いま特に必要とされているのではないのでしょうか。



MOISでは…

生徒も先生も自分がすべきこと、できることを行って、感染を予防しています。

それでも、いつ誰が感染しても不思議ではありません。

どれだけ気を付けていても、誰もが病気になる可能性を持っているからです。

いつか誰かが感染したとしても、私たちはその人を特別だとは考えません。

感染したことを責めたり、悪口を言ったり、仲間外れにしたりしません。

感染が拡大して、臨時休校になったり、学校行事が中止になったりしても、それはウイルスのせいであって、感染した人のせいではありません。

もし自分や家族が感染してしまっても、それを秘密にしないで、正しい対応ができるよう、まずは保健所に、そして担任の先生に相談してください。



MOISでは…

もしMOISの仲間が感染してしまっても、ウイルスとの闘いに専念させてあげましょう。

誹謗・中傷や偏見・差別などとの「もう一つの闘い」をさせることがないように、自分自身の言動をきちんとコントロールしましょう。

色々な思いや考えが頭に浮かぶかも知れないけれど、何を口にするか、どう表現するか、相手の心情を思いやって、心無い言葉や態度にならないよう、表現する前に考えましょう。

私たちが目指す「**よりよい世界の未来**」は、そうやって実現していくのです。

★昨日配られた「**ほけんだより**」も、ぜひ読み返してみてください。